

<p>PSB (Process Safety Beacon) 2008年1月号 の内容に対応</p>	<p>SCE・Net の 安全談話室 (No.21) http://www.sce-net.jp/anzen.html</p>	<p>化学工学会 SCE・Net 安全研究会作成 (編集担当:小谷卓也)</p>
--	---	--

1月のテーマ：2007年ピーコン復習 教訓を忘れないよう！

(PSB 翻訳担当：小谷卓也)

司会：明けましておめでとうございます。PSBの翻訳だけでなく、公開講座その他我々の活動がいろいろな方から評価されるようになり有難いことですね。今月は、去年発行されたものの中から選ばれた6回分について、思い出したこと、追加したいことなどあればお願いします。

SBY：「1月タンク凹み」は2月号の間違いですね。このようなタンク事故は皆身近に経験したり、安全ミーティングで話し合ったりされているもので、それだけ万国共通・頻度の多い事故なのですね。ちょっとしたミスが大きな被害を引き起こすので、如何にミスを少なくするかという仕組み作りが大切です。

MZG：4月分では「Potato Head」に対するプラント側の緊急対応がよかったということが紹介されていました。でもこの場合、会社は被害者ですよ。空からの「闖入者に対するお咎めはなし」なのですかね？

NGY：災害事故にならなかったのはよいとして、操業停止による損害賠償あるいは補償をイベントの主催者に請求できるのですか？ こういうとき主催者の責任は問えないのでしょうかね？

KTN：その点についての情報提供はなかったようです。多分「お祭りの主催者や参加者から損を取り返して評判を落とすよりは...と背負い込んだのだろう」ということでした。

司会：気球に限らず、プラントはグライダー、ヘリコプター、ミサイルなど空からの落下物に対しては全く無防備であり、訓練もできませんね。保険はどうなるのですかね？

SBY：羽田空港近くの京浜コンビナート、離着陸のコース通る京葉コンビナート、鹿島のコンビナートも成田空港に出入りする飛行機が上空を通ることもあるし、日本では工業地帯は人口密集地にあるのが多いですから、現役のときにはあまり気にしませんでしたけれども、考えると怖い話ですね。

KTN：滅多に起こらないと考えられる事故に保険のかけ方は会社によって違いがあると思いますが、この種の事故に対する保険をかけることが可能なかどうかご存知の方おられますか？

KAJ：「企業財産を対象とする包括保険」というのがあります。空からの飛来物による災害は「不慮の事故」に該当するので請求は可能です。戦争や武力行使でなければ、始めから「天災」としてあきらめる必要はないということです。

SBY: 泣き寝入りしないですむ方法はあるんですね。安心しました。

司会: 6月の「安全文化」ですが、これには大事故の写真が並んでいますね。今までこの談話室で紹介していない特種があれば聞かせてください。

SBY: 安全文化が会社・組織に浸透するには、トップが先ずそれを見える形で示さないと だめだと思います。「安全は現場がしっかり取り組めば良いのだ」というような本音を感じられるトップは、トップの資格がありませんね。

司会: 化学プラントと直接関係なさそうなスペースシャトルの事故写真が二つもありますが、安全文化上問題になるのはどんなことだったのでしょうか？

WTB: 人により注目する点は異なるでしょうが、チャレンジャーの場合、固体ロケットブースターのOリングが凍結していることが現場で指摘されていたそうです。それを無視し打ち上げた直後、そこから高温ガスが漏れ出したのがきっかけで液体燃料が漏れ、引火爆発したとされています。これ以後現場レベルの判断が優先されるようになったとか。

KTN: コロンビアの場合は、断熱材が直接原因とされているようですが、その前にタイルや断熱材の脱落があったのに何故対処しなかったのかという気がした人も居られたでしょう。幾つかの調査グループの中には、コスト/スケジュールと安全性が両立しない場合、安全性が一番ないがしろにされたと判断したグループもあったと聞いています。大雑把な言い方をすれば、官僚的な判断が優先し、安全確保のための環境整備が軽視されたという、Flixborough や Texas City のプラントの大事故と共通した問題点が浮かび上がってくるような気がします。

SBY: 8月の酸欠事故・9月の火気工事事故ともに繰り返されている事故で、聞く度に「またか」と遣る瀬無い気持ちになりますね。危険性・作業手順教育を行っても、魔が差したよううっかりミス・手抜き、特効薬はないので地道に取り組む以外、解決策は思い当たりません。正に安全文化の浸透程度を示す事故ですね。

司会: 今までPSBに使われた英語で「これは何?」と思われたような表現あるいは単語はありませんでしたか？

KTN: 3月分の What you can do にあった”impulse line”。一瞬、「オヤ?」と思いましたが、計装関係で使うjargonで”pneumatic signal transmission line”(空気信号配管)のことでした。

司会: 有難うございました。「何とかは忘れた頃にやってくる」と言いますが、今までの事故例で学んだ教訓、忘れないようにしましょう。

【談話室メンバー】

IWM: 岩村孝雄、UNO: 宇野洋、KBS: 小林浩之、KTN: 小谷卓也、SBY: 渋谷徹、NGY: 長安敏夫、
HOK: 日置敬、MZG: 溝口忠一、YOK: 山岡龍介、YMZ: 山崎博、WTB: 渡辺統一